

市立大町山岳博物館 企画展

たい ざん かん もも せ しん た ろう  
對山館と百瀬慎太郎

岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る



大町山岳博物館



市立大町山岳博物館 企画展

# 對山館と百瀬慎太郎

岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る

- 主催 市立大町山岳博物館
- 会期 平成14年10月5日（金）～12月15日（土）  
（10月9日15・22・29・11月5・12・19・26日・  
12月3・10日は休館）
- 開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 会場 市立大町山岳博物館 特別展示室・ホール
- 観覧料 大人400円 高校生300円 小・中学生200円
- ※ 常設展示と共通割引、30名様以上の団体は各50円引  
そのほかの各種割引についてはお問い合わせください

# ごあいさつ

---

このたび、百瀬家の皆さまはじめ、多くの方々のご協力により「たいざんかん對山館と百瀬慎太郎展」を開催する運びとなりました。

ふりかえれば、大町の八日町にあった對山館(1892前後～1943)とその主人百瀬慎太郎(1892～1949)は、まさに大正から昭和初期に花開いた登山文化の原点でした。遠来の登山者の多くが對山館をベースに山をめぐり、山に思いをはせたのです。

慎太郎生誕110周年、大町市の「山岳文化都市」宣言元年にあたるこの年に、あらためてその意味を探る機会といたしました。

この企画展が、對山館と百瀬慎太郎そして岳都大町へのより深いご理解の一助となり、当時の登山文化に思いをはせ、これからの大町と登山を考える場ともなれば幸いです。

ご高覧のほど、お願い申し上げます。

平成14年10月5日

大町山岳博物館

# 山岳文化都市宣言

---

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人との共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館50周年の節目にあたり、山岳博物館創設時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人との共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

平成14年3月15日

大町市



# もくじ

---

## ごあいさつ

## 山岳文化都市宣言

## 展示構成

<b>I. 對山館誕生前史</b> .....	<b>6</b>
1. いにしへの針ノ木峠    2. 千国街道 大町宿	
<b>II. 對山館の誕生</b> .....	<b>11</b>
1. 近代登山の黎明    2. 今旅館誕生	
3. 長井雲坪「對山館」命名と額の謎	
<b>III. 對山館と慎太郎</b> .....	<b>13</b>
1. 對山館再現    2. 生いたちとあこがれ    3. 慎太郎 人の山脈	
4. 對山館の舞台裏    5. 山と慎太郎    6. もっと慎太郎	
<b>IV. 大町登山案内者組合</b> .....	<b>24</b>
1. 大正・昭和初期の登山事情    2. 山案内人と登山案内者組合	
3. 山案内人の仕事    4. 山案内人のプロフィール	
5. 武勇伝・珍談・奇談…エピソードにさぐる	
<b>V. 對山館その後</b> .....	<b>29</b>
1. 戦争と對山館    2. 山小屋のともしび    3. 大町山岳会のあゆみ	
<b>VI. 展示図版説明</b> .....	<b>31</b>
<b>VII. 展示資料目録・資料解説</b> .....	<b>34</b>
<b>VIII. 百瀬慎太郎 執筆・編集歴</b> .....	<b>35</b>
<b>IX. 對山館と百瀬慎太郎 主要年表</b> .....	<b>36</b>
<b>X. 参考文献</b> .....	<b>38</b>

## 凡 例

1. 本書は市立大町山岳博物館において、平成14年10月5日（金）から12月15日（土）まで開催の企画展「對山館と百瀬慎太郎 岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る」の展示解説書である。
2. 写真や図表などの図版に付した番号は展示写真・図表パネルや展示資料の解説プレートの番号と対応するものではない。
3. 資料名称は原則として所蔵先の呼称によるが、一部統一を図るために変更した。
4. 会期中、一部展示替えを行う。
5. 企画展の企画は当館学芸員・岑村隆、関悟志を中心に飯島喜久代氏、相澤亮平氏、清水隆寿氏ならびに館長・倉科和夫、副館長・宮野典夫、学芸員・清水博文、千葉悟志による。企画展、本書および機関紙『山と博物館(企画展特集号)』の執筆は学芸員・岑村隆が担当した。
6. 本書は平成14年にデータ化したものに一部修正を加え閲覧用に作製したものである。



山を想えば人恋し

人を想えば山恋し

慎太郎

# I. 對山館誕生前史

大町の西方、針ノ木岳と蓮華岳の鞍部に針ノ木峠（2,541m）はある。南アルプスの三伏峠さんぶくについてわが国第2位の高さを誇るこの峠は、古来より越中と信濃を結ぶ最短ルートとして様々な歴史を刻んできた。

一方、千国街道は南北に伸びて塩や海産物の輸送ルートとしてにぎわい、大町宿はその一大中継地であるとともに善光寺道など東方への道の起点でもあった。

大町は北アルプス周辺地域では数少ない四方の人と物と文化の交差点、合流点だったともいえる。

百瀬家はその大町で、問屋取次とん や とり つぎという中心的な商いの一端をにっていたと伝えられている。

## 1. いにしへの針ノ木峠

隣県との間に自動車道が通じていない唯一の例である富山長野県境にも古くから越中信濃をつなぐ一筋の間道が存在した。野口村から加賀川（箆川かざのぼ）を遡り針ノ木峠を越え黒部川を渡り立山の肩を越えて芦峯寺あしくらじに至るサラサラ越・ザラ越などと呼ばれる道である。歴史に名高い富山城主佐々成政さつさなりまさの雪中ザラ峠越え以前から商人などの秘かな越境ルートだったといわれ、信州側からの立山登拝の裏参道であり、漁獵伐採のため野口村の百姓や山人たちが黒部谷に入り込む道であり、加賀藩による御縮り山巡見路おしまでもあった。

### ①佐々成政

富山城主・佐々成政が天正12年（1584）の真冬に針ノ木峠を越えたとする説がある。隣国の侵攻寸前の窮地に追い込まれた成政は、まだ秀吉と和睦していない浜松の家康に直接会って意向を問い、秀吉打倒の挙兵を懇願すべく唯一残されたルート、厳冬の北アルプス横断を企てた。

一説には11月23日に富山を出立し、ほぼ100人の従者に守られて立山温泉→ザラ峠→黒部川中瀬平→針ノ木谷→峠おおいで→野口村大出に至り、遠州街道を經由して12月25日に家康と対面したが、すでに秀吉との講和を決めた家康の意ひるがえを翻すことはできず、むなしく帰還したという。

ルートを確定する史料はなく、日付や従者の人数なども史料によりまちまちであるが、当時から針ノ木越えのルートが存在していたこと、真冬の北アルプスを越えて家康に対面したことは事実であり、埋蔵金伝説にも彩られて興味はつきない。

### ②山人ぼっしょうの跋涉

山人とは、狩猟・漁労・採集のために山へ入り、山の幸を得ることで生計を立てた者をいう。その多くは山里に住む獵師きこりや樵である。彼らは動植物や鉱物など、山岳地域特産の天然資源を得るため、年間を通じて奥山に踏み入った。

針ノ木峠周辺を生活圏とする山人たちも、峠を踏み越え、高瀬や黒部の谷を渡り、

冬はカモシカやクマを捕え、夏はイワナを釣り、ときに薬草として重宝されたコマクサを採るなどして、生活の糧としていたのである。

### ③加賀藩黒部奥山廻り役

徳川の幕藩体制がしかれても、加賀藩(前田家)にとって未知の部分が多い東方(北アルプス)は警戒すべき領域だった。

三代利常は、寛永17年(1640)に初めて黒部奥山の監視・警戒役(黒部奥山廻り役の前身)を設け、以降御縮り山として一般の立ち入りを禁止した。奥山廻り役の定期巡回は1650年代から始まり、北アルプスの稜線は彼らによって縦横に歩かれた。

当初の国境警備的な軍事色は藩政の安定とともに薄れ、山林資源管理の意味合いを濃くしたのだが、一方的に後立山の稜線を国境と決めた加賀藩と、黒部川を境界と黙認していた松本藩が正式に国境を稜線上と合意したのは天保9年(1838)と大変遅かった。そのため黒部川を境として疑わない地元野口村の人々の“盗伐”にまつわるトラブルも少なくなかったという。

奥山廻り役の制度は明治3年(1870)まで継続された。

### ④立山信仰の裏参道

御縮り山とされてからも立山信仰登山は許されたが、一定コース以外を歩くことは厳禁だった。立山信仰の歴史は古く、古代から山岳信仰修験道の聖地として全国の信者修行者を集め、安曇の地にも立山講の組織ができていた。

立山の表口は富山側で、岩峯寺・芦峯寺がその登拝基地である。大町地方の信者の中には正規の遠回りルート(千国街道・北国路)を嫌いザラ越えの近道を裏参道として利用する者が出てきた。「信州の人禅定(信仰登山)せんに富山へ出ては多くの日数をへて数十里なり。故に年毎に山口閉ぢて後、立山の後ろの捷道(注・近道)より登山す。信州仁科野口より絶頂まで僅かの九里とぞ」(笈埃随筆)。閉山後の初秋の候をねらって針ノ木峠を越えて立山登拝をしたのである。芦峯寺の信州担当の坊舎のひとつ、宝伝坊などを頼れば裏道からの通行も黙認されたという。

表参道からの登拝者がまず芦峯寺の姥堂に詣でたと同じように、裏参道の登拝者は野口村大出の姥堂(西正院)に詣でてから入山した。本尊である室町時代中期作の木造大姥尊坐像は、今も秘仏として存在している。

針ノ木谷を下り平で黒部川を渡った後はザラ峠を越え、立山温泉に泊まって登拝するのが一般的だった。これは現在の立山黒部アルペンルートの徒歩によるさきがけである。

### ⑤幻の針ノ木新道

江戸時代に立山裏参道が利用されていたが、このルートを改修拡張して越中信濃間に牛の通れる物資交流の新道を貫通しようという企てが、明治初年両県有志により一度は実現したのである。自然の猛威と資金不足の前に短命に終わった幻の道。

---

針ノ木新道・立山新道・信越新道・越信新道・越中新道・信越連帯新道など、様々に呼ばれている。

その道程は、野口村・（4里）・針ノ木峠・（2里18丁）・黒部川・（3里）・立山温泉・（5里）・越中下新川郡原村・（6里）・富山。通計20里18丁（82km）。新道工事区間は野口村～原村間であった。

信州側有志の先達は野口村飯嶋善造ほか大町組旧庄屋数名。越中側有志は旧加賀藩士十数名。盟約団結して開通社と称した。

新道企画の発端は、善造の父又左衛門の発願に因る。天保時代から考えていた案を嘉永年間に松本・加賀両藩に嘆願したが、加賀藩の立入禁止政策は当然これを拒否した。父親の心願を承け継いだ善造は明治4年松本藩役所への出願を皮切りに何度も工事の許可を新県庁に嘆願する。

明治7年開通社結成。8年石川・筑摩両県へ工事許可申請。黒部川をはさんで東側を信州、西側を越中で分担。工事費償却のために道銭を徴集する（21年間）のは現代の有料道路の先駆けだった。9年着工。2ヶ月で完成の目論見だったが苛酷な自然の猛威と資金切れの障害に阻まれ、ひととおりの完工は11年夏。県や国に資金の拝借・御下付を頼み込み、なんとか12、13年と二夏の新道営業を行ったが、道路修復・橋梁架け替えの資金の目途が立たず、13年10月新道廃棄・開通社解散のやむなきに至った。

総工費10,800余円の内、8,800余円を同盟有志の私費で賄い財産を遣い尽したが、針ノ木・立山の溪に懸けた壮大な男達の夢は、現代にまた見直されつつある。

## 2. 千国街道 大町宿

「大町」の名は仁科氏が京都の町割をまねて街造りをしたころ、その中心街の意味でつけられたもので、現下仲町あたりの一区画を指していたようだ。江戸時代には「大町」の名がこの街並全体を包む大町村となり、松本・糸魚川間30里（120km）の千国街道の中間最大の宿場町、物資の中継集散基地として繁栄するに至った。現大町市（常盤地区を除く）と北安曇郡域を大町組と呼び、松本藩出張所に当たる陣屋（御他屋）が置かれ、大町組五十四か村の村役人（庄屋・組頭）達が事務連絡に往復した。

### ①街道と大町

千国街道は塩をはじめ海産物の輸送ルートとして内陸部と沿海地方を結ぶ、旅客よりは物資の輸送を主とする経済路線だった。

大町と日本海を結ぶ最短ルートはザラ峠越えの道だったが、重量の嵩む塩などの運搬にはこの山岳ルートは険阻に過ぎた。北陸到来の荷物は、遠廻りでもすべて糸魚川経由の千国街道を牛とボッカ（歩荷）の背によって運搬されるほかなかった。物資輸送には中馬のような目的地まで直行する通し荷と、宿場中継の継ぎ送り（継荷

の方法とがあり、塩や鰯など主要な海産物は継ぎ送りが原則だった。継ぎ送りは問屋をはじめ宿場の利益になるが、通し荷では利益が薄い。そのため送り主側と宿場側との間にしばしば悶着もんちやくが起きた。街道に占める宿場の力は大きく輸送順路をも左右したのである。

大町宿は街道をはさんで南北に細長く発達した町並みの姿が示すように、南北交通の要衝ようしゅうだったが、東西交通の拠点ともなっていた。東方へは善光寺や上田・松代方面へ通じる山中通りの道が大町を起点にして蜘蛛手に延びており、西に向いては交通量は少ないものの立山裏参道ザラ越えルートの出発点にあたる。

南北軸上に発展した宿場町大町が旅館（対山館）を生み、東西軸の岳だけへの道が針ノ木峠への窓を開き、この両軸の交点上に百瀬慎太郎が生まれ育ったとも言えようか。その母胎となる座標軸は遠く江戸時代以前から準備されていた。

## ②問屋取次業と百瀬家

百瀬家は大町の少なくとも江戸時代以来の旧家で、住人の異動の激しい町場にあつて、中心部の中町（現在は「仲」の字を使う）や八日町に家を構えて当主は代々新右衛門しんえもんを名乗り、慎太郎が生まれるまでに数百年を経ている。

今から約300年前の「大町屋敷絵図」（1709）には、下中町通りの東側に新右衛門の名が載る。宿場町の目抜き通りの真ん中に住居して、百瀬家の言い伝えでは問屋取次業とりつぎを営んでいたという。「問屋取次業」とは文献に見出せない言葉であり、その具体を知り得ないが、宿場町における問屋は旅客や荷物の輸送に携わる商売であり、荷継問屋・荷宿などとも呼ばれていたから、顧客と問屋の仲介業だったと想像する。

百瀬家の商売を窺うかがわせる資料として百瀬家伝存の「先触さきふれ」と銘打つ一通の古文書がある。官御用の伝馬でんまの調達を依頼されたもの。

商売柄使用人も多かったと見え、明和7年（1770）の「大町村宗門改并五人組帳しゅうもんあらためあわせ」（栗林士郎氏蔵）によると、新右衛門の家には四家族が同居し総勢17人の大所帯だった。

「家屋敷譲渡証文」（百瀬堯氏蔵）によれば、新右衛門は文化12年（1815）に八日町に家屋敷を五十両で買い取っている。これが現在旧対山館の建つ場所であろう。

明治5年の「大町屋敷絵図」にはこの場所に百瀬新一の名が見える。明治になり「新右衛門」のように古い官職位階を意味する名前は改名するよう政府から勧告が出た。そのため新右衛門を新一と改名したとも考えられる。いずれにせよ、江戸時代に世襲した「新右衛門」の通称は明治御一新で断たれた。

## ③旧今の門構えを想像する

問屋取次を商いとしていたといわれる八日町の今はどんな屋敷だったのか。大町に現存する江戸時代の商家の様子と、いくつかの史料から想像してみたい。

---

戸時代の商家の様子と、いくつかの史料から想像してみたい。

「家屋敷譲渡証文」（百瀬堯氏所蔵）の記載によると間口7間・裏行6間である。また安政3年（1856）の「地相図」（百瀬堯氏所蔵）によると、間口はそのままにして、奥行を4間ほど増築していることが推測される。この図は八卦・方位・地理風水・畳数などから占ったもののようで、「最上吉」と見立てている。

大町宿の場合、その敷地は間口7～8間・奥行70～80間の狭長短冊形が普通だった。旧今の敷地も同様で、母屋の店は間口いっぱい<sup>はっけ</sup>に建て、背後に土蔵や納屋を建てている。また母屋は表通りから裏に通り抜けることができる通り庭（土間）を中央やや右側に作り、右奥には馬屋を、左側には部屋を二列に並べ接客部と座敷などの居室部としている。

平屋の可能性もあるが、ここでは大町宿に一般的な軒の低い二階建て板葺屋根<sup>いたぶき</sup>を表してみた。

## II. 對山館の誕生

明治20年代なかば、百瀬家は大火による家屋敷の焼失を機に旅館へ転業する。今旅館の誕生である。それまで千国街道とかかわり続けた百瀬家は、やがて北アルプス登山にも深くかかわることとなる。

旅館はいつのころからか「對山館」が通り名となり、明治30年代後半から登山者の定宿としての評判が高まっていく。

### 1. 近代登山の黎明

明治維新前後に新しい登山の形態が現れてくる。それまでは狩猟・漁労・採集、信仰、軍事的な目的での登山が主であったが、いわゆるお雇い外国人らによる調査や趣味の登山、西洋流の知識を体得した日本の自然科学者による学術登山、政府による測量登山、教養人による探検登山など、様々な人々による多様な目的の日本的近代登山が富士山や北アルプスなどでくりひろげられるようになる。

やがて登山という行為そのものや山岳美の魅力が書物などで広く一般に伝えられると、さらに登山者が増加し、登山環境の整備・充実が時代の要請となっていく。

### 2. 今旅館誕生

新右衛門家は江戸末期から明治にかけて利平・新栄と続いた。だが新栄は子に恵まれず、20ほども歳の離れた弟金吾（慎太郎の父）をかなり若いときに養子としたようだ。

明治22年（1889）11月24日深夜、いわゆる八日町の大火でも消失する。新栄50歳、金吾30歳前後のときの災難だった。ここで百瀬家は旅館への転業を決める。

間口8間・奥行12間。切妻白壁総三階建て。広い屋根裏（四階）まで吹き抜き、城の天守閣のように大胆に階段と回廊を配した背の高い特異な設計だった。着工は23年春からとするのが自然である。ウォルター・ウェストンが初めて泊まった明治26年8月には一点のシミもない座敷に通されほかに客も大勢いたが、大工の作業の音も聞こえたという。完工には相当の年月を要したことが想像される。

金吾も商いの実務に采配を振るっていただろうがまだ若い。旅館への転業と新築を決断したのは新栄だったのではないかと思われる。

### 3. 長井雲坪 「對山館」命名と額の謎

旅館の別称「對山館」は誰の命名で、いつごろから併用されていたのか、その来歴は判然としない。一説に南画家長井雲坪の命名だといわれ雲坪真筆の「對山館」扁額も百瀬家に現存するが、雲坪が心安く對山館に滞在するようになったのは明治28年以降のことであるから「創業以来の雲坪の命令」とは現時点では言いがたい。

少なくとも明治後期から三階の軒下には「對山館」の扁額が掲げられており、少なくとも3回は架け替えられたことがわかっている。

- ・ 最も古いものは明治末年に写真に収められたもので、絵文字風の「△△」を用いた行書体の額である。

- 
- ・ 次は大正から昭和初年に撮影されたものといわれる楷書の独特の字体である。
  - ・ そして最も新しいものが早くて昭和11年の前後2～3年から18年の廃業まで掲げられていた雲坪真筆の拡大模写額（当館所蔵）である。

どの額も宿泊した多くの文人や登山者にとっては馴染み深い「對山館の象徴」であり「<sup>だけ</sup>岳の町のシンボル」だったのだろうが、残念ながら雲坪の真筆と模写の2点以外は、その所在も<sup>きごう</sup>揮毫者もわかっていない。

# Ⅲ. 對山館と慎太郎

明治末から大正初期にかけて對山館を訪れた都会の登山者たちは、新しい文化と教養の香り、広い世界の知識で若き慎太郎を刺激した。

自らの北アルプス登山の実践と外からもたらされるものの独自の吸収によって、慎太郎は日本をはじめ海外の山岳界の動向にも通じた希<sup>けう</sup>有な存在となっていく。

大正から昭和初期、北アルプス北部をめざす登山者に、對山館と百瀬慎太郎の名は知れわたった。

## 1. 對山館再現

對山館は登山家や文人の紀行、随想などに様々に登場もし、いくつかの写真によっても今に伝えられているが、いったいどの部屋が、また敷地内のどの施設がどう使われていたのだろうか。

### ①建物外観・配置模型（昭和16年前後を想定・縮尺50分の1）

母屋は間口8間・奥行12間。大火の教訓をいかしたと思われる切妻白壁総三階建て屋根裏部屋付。町場の伝統的家屋は背の低い平屋か二階建てが多かったので、これは頭抜けて高い建物だった。

慎太郎の実娘三氏の記憶と写真をもとに作製したが、忠実性には限界がある。この模型はあくまで、より現実に近いイメージ以上のものではない。

### ②母屋間取及び建物配置図

慎太郎の実娘三氏の記憶を総合して、四女寺田美穂<sup>みね</sup>氏が作成した図。なお、1階のタタキの部分は、昭和6年（1931）前後に食堂に改装された。「1番」「2番」などは当時の部屋の呼び名である。

大黒柱の位置など、1階から4階までを透視すると若干の不整合が認められる。今後の課題としたい。

### ③当時をしのばせる写真たち

對山館が「生きて」いたころの様子が伝わってくる。当時の写真技術の問題もあるのだろう。外光のあまり入らない1階の室内写真は数少ない。

### ④今に残る家財道具 実物資料

昭和18年（1943）6月、時代に追いたてられるように百瀬一家は對山館を去った。膨大な家財道具のほとんどは、くれ好きだった慎太郎の気質を反映して、近隣・縁者・知人などに無償でひきとられた。百瀬家や親族のもとに残るものは多くはない。

## 2. 生いたちとあこがれ

幼くして隻眼<sup>せきがん</sup>となったことで慎太郎はずいぶん苦しんだ。

慎太郎の作歌や山岳活動の根源には、心にある傷の痛みを昇華<sup>しょうか</sup>させるための己<sup>おのれ</sup>との闘いがありつづけたのかもしれない。

## ① 慎太郎の誕生

慎太郎（戸籍上の名前は真太郎）は明治25年（1892）12月10日、父百瀬金吾、母万世の長男として誕生した。ウェストンが初めて對山館を訪れた前年のことである。金吾は穏やかで誠実な面倒見のよい人柄であり、静かに生け花などをたしなむ趣味人でもあった。大町の六日町の松本藩典医・斎藤文毅の娘であった万世には漢文の素養があり、慎太郎は母の口ずさむ漢詩を耳にしながら育った。

慎太郎は穏やかな反面、友人が理不尽な目にあつたと知るや上級生と渡り合うような気性の激しさを合わせもっていたという。

## ② 家業と夢の葛藤

2歳の年、囲炉裏に落ちた慎太郎は鍋の湯をかぶって熱傷を負う。やけどの名医といわれた伯父斎藤謙一郎（文毅の長男）の献身的な手当と秘伝の膏薬により奇跡的に一命をとりとめたものの、右目は永遠に光を失った。

大町中学校を卒業した慎太郎は、さらに上の学校へ進むことを望んだが、長男であるがために許されず、不本意なまま家業に就く。

## ③ 山への目覚め

慎太郎は明治39年（1906）大町中学2年の夏、友人とともに白馬岳に登った。慎太郎にとって初めての北アルプス登山であった。山の虜となった慎太郎は明治42年、17歳に満たず日本山岳会へ入会（会員番号215番）、明治43年（あるいは翌年）の10月には、黒部の主こと遠山品右衛門とその長男作十郎の案内で「悪絶険絶天下無比」といわれた新雪の針ノ木峠に立ち、黒部川の平を往復した。意にそまない宿屋家業に鬱屈した日々を送る慎太郎に、晩秋の針ノ木峠の荒涼とした風景は深い感銘を与えた。

山は慎太郎に、心の安寧と多くの友人をもたらす。

## 3. 慎太郎 人の山脈

慎太郎には北アルプスさながらの人の山脈が連なっていた。それは登山家や歌人に限定されない。旅館業ゆえ、ことさらにもたらされる新しい出会い、新しい文化を、時に主客の枠を超えた親密なつきあいの中で自然体で自らのものとし、他へと伝えた。

その交流の場の中心が對山館だったことは言うまでもない。

## ① 交遊録

慎太郎にはたくさんの友人がいた。山で結ばれた人々、短歌で結ばれた人々、酒で、遊びでと広範なつきあいがあった。商売に熱心ではなかった慎太郎にとって、山と人こそ財産だった。

ここでは特筆すべき交遊録のみ紹介する。

### ・ 辻村伊助 (1887~1923)

慎太郎の山への開眼の最初の恩人。明治39年日本山岳会会員となる。上條嘉門次とともに冬の上高地に登山者として初めて入山。大正2年に渡欧してユングフラウ、グロースシュレックホルンに登頂。帰国後、箱根に高山植物園をひらくが、大正12年関東大震災のおり、スイス人の妻や子供たち、丹精をこめた高山植物園もろとも崩れてきた土砂の下敷きとなり他界。日本最初期のピッケル使用者。

著者に知的ロマンチズムにあふれる『スイス日記』『ハイランド』などがある。

※ 慎太郎は彼によって文学への知識も深めた。

「北あづみ君を憶えば板屋根のみぞれの音の胸にひびくも」（慎太郎への辻村私信より）

### ・ 石川欣一 (1895~1959)

動物学者石川千代松の長男。アメリカのプリンストン大学留学中に大阪毎日新聞に入社。ニューヨーク特派員、ロンドン支局長、東京本社出版局長を歴任後、サン写真新聞社長となる。立教大学ナンダ・コート遠征、関西山岳界の発展に尽力。当時「最もスマートな山男」といわれた。

※ 軽妙洒脱な山の随筆は、信州大町と敬愛する「慎太郎さん」のことでみちみちている。

仙台二高在学中の白馬岳登山以来慎太郎と親交を結び、お互いの子供たちを預けたり預かったりと家族ぐるみの交際があった。冬はスキー、夏は山と、時間さえあれば大町を訪れ、慎太郎の弟孝男や近所の平林卓爾、曾根原耕造らとも親しくなる。

大正15年、慎太郎は山田珠樹と岡野馨(陸軍大学フランス語教授)を石川から紹介され親交を深めた。

### ・ 榎 有恒 (1894~1989)

日本山岳会第四、第七代会長。大正10年アイガー東山稜世界初登攀。本場の登山技術を日本に持ち帰る。昭和31年第三次マナスル登山隊隊長として世界初登頂に成功。

※ 榎は仙台二中時代、兄弟での白馬岳登山のおりに初めて対山館を訪れる。大正3年針ノ木峠越えに際して、対山館で売られていた慎太郎考案の専用鳶口と三本歯のカンジキを使用。後年「わが国登山用具の発達上貴重なもの」と評価している。終戦後の不遇時代、慎太郎のすすめで現在の大町市常盤に再疎開。慎太郎とともに、日本山岳会信濃支部の設立に尽力し、初代会長をつとめた。

榎の長男恒治の大町中学在学時の担任丸山彰は慎太郎や榎の薫陶を受け、戦後に全国初の全校登山を創始。丸山は慎太郎と親しかった片桐悟郎の大町中学の教え子でもあった。

◇「君去ると聞けば高瀬の板橋をわがふむのちの寂しさを思ふ」

※ 昭和22年、榎の帰京に先立ち、慎太郎は鹿島槍ヶ岳に登山(大町の青年縣信同行)。その折の短歌は彼の人生の集大成ともいえる。

### ・ 茨木猪之吉 (1888~1944行方不明)

画家。浅井忠、中村不折に学び、後に日本山岳画協会を設立。小島烏水らと山行を重ね、日本山岳会機関誌『山岳』や辻村伊助の著書の表紙、小島烏水の著書等に挿し絵を描く。歌誌『創作』の表紙絵を描き、明治43年以来若山牧水とも親交をもった。

※ 中綱湖畔の風景を愛し、しばしば湖畔の宿和泉屋に滞在。慎太郎は和泉屋とも親しく、滞在中の茨木のもとへもたえず訪れていた。

◇「ここに来てかならず憩ふ和泉屋の囲炉裏の櫓火夏はひそけし」

※ 戦争中、敵国人となったウェストンのレリーフを取り外して保管するため上高地へ出かけ、帰途対山館に立ち寄る。昭和19年、大町の慎太郎のもとに立ち寄った5日ほどの後、穂高山中で行方不明になる。後に茨木のスケッチブックが遺品として慎太郎に贈られた。

---

• **山田珠樹 (1893~1943)**

フランス文学者。ソルボンヌ大学へ留学。心理解剖の視点を小説研究に取り入れたスタンダード、ゾラの先駆的研究で知られる。震災後の東大図書館の再建につくす。森茉莉（作家、森鷗外の娘）と結婚。その後茉莉は二人の子を残して山田家を去る。

昭和9年、結核のため休職。

◇「うつけわれ臥やれる君が枕辺にたびたる酒を飲みしれにけり」

※ 對山館廃業の年に慎太郎は山田珠樹も病で失うこととなる。

• **伊藤孝一 (1891~1954)**

名古屋の資産家。大正7年、河東碧梧桐らの「日本アルプスの縦走」に刺激され大町の案内人黒岩直吉と剣岳に登る。大正8年、伝刀林蔵の案内で北ア最奥の未開地といわれた針ノ木峠から烏帽子岳、槍ヶ岳をめぐる。慎太郎、赤沼千尋らと大正12年3月に「雪の立山・針ノ木越え」に成功、日本初の積雪期北アルプス登山記録映画をつくる。

※ 慎太郎の親友のひとりであり、季節を問わず對山館に滞在した。赤沼は慎太郎と伊藤の関係について「何事についても必ず意見が相違し、またその相違をかくそうともしない。華やかに衝突するのである。」（『北ア黎明期の人々』）と述べている。

• **赤沼千尋 (1896~1979)**

燕山荘主人。大正10年山荘建設のおりには日本山岳会から異端視されたという。

赤沼は慎太郎にも避難小屋としての山小屋を大沢に作るよう再三すすめていた。

「雪の立山・針ノ木越え」の快挙について、「もちろん伊藤君の打ち込み方の激しさと周到な用意、それに出し惜しみしない金力が要因ではあるけれども、百瀬君がいなかったらあるいは完成しなかったかも知れない」（『北ア黎明期の人々』）と慎太郎を評価している。

• **若山牧水 (1885~1928)**

酒と旅を愛し漂白の歌人といわれた。本名繁。生来、水が好きだったことから、母の名のマキとあわせて「牧水」と名乗った。明治43年『創作』を主宰、一躍文壇の注目を浴びる。

※ 明治44年4月、慎太郎は牧水と出会い、茨木も對山館に泊まっている。

『いついつと待ちし櫻の咲きいでゝ今は盛りか風ふけどちらず 牧水』

對山館に残るこの短冊は、この時の作であろう。

◇「肌寒き四月信濃の山風に吹かれて去りし君のしのばゆ」

同年7月、慎太郎は牧水門下となった。

• **吉田絃二郎 (1886~1956)**

小説家、劇作家、随筆家。『早稲田文学』に発表した「島の秋」により一躍脚光をあびる。叙情的で流麗な文体を特徴とした。

※ 大人気の新聞小説「静夜曲」（大阪毎日新聞、東京日々新聞併載）は對山館に滞在中に書かれ、慎太郎とその友人がモデルと思われる人物が登場する。作品に雨の描写が多かったため、当時の学生たちに「その夜も雨にしておけ絃二郎」とうたわれたという。慎太郎の四女美穂の名づけ親でもある。

「こけら葺きの屋根、石をのせた屋根から屋根へとつづく大町は、なつかしい信濃の山の町の一つである。古い糸魚川街道が北から南へ走っている。その街道を中心に行儀よく山の町は並んでいる。老木があり、高瀬川の積があり、雪をいただいて鹿島槍や爺ヶ岳があり、いかにも落ちついた町である。對山館の三階の爛干にもたれて街を眺めるとしみじみ旅の心もわく。松茸やしめじを並べた店頭に秋の雨がけさもしとしとふりつづいている。この前大町をたずねた時、わたくしはしづかな時雨の中に笛の音を聞いたことを記憶している」（『山よ雲よ』朋文堂）

## ②早稲田大学との縁

慎太郎の妻みつるの歳のはなれた弟、熊井文吾が早大ラグビー部員だった縁で、昭和前期に對山館はしばしば大西鉄之助率いるラグビー部の夏の合宿の拠点となった。練習には町営運動場（現在の西公園グラウンド）が使われたという。

また昭和2年（1927）12月30日には、大沢小屋を基地に第4回冬季訓練をしていた早大山岳部員11名全員が赤石沢に発生した雪崩に襲われ、4名が行方不明になるという大遭難が起きた。慎太郎は對山館を捜索本部とし、弟の孝男が現地指揮をとった。翌年6月の4名すべての遺体発見まで宿舎（對山館と大沢小屋）の提供など惜しみない無償の援助を続けた。

## ③信州教育界との関係

明治中期から大正時代にかけて、信州のとりわけ理科に関する教育と研究は群を抜くレベルだったという。特に高山をフィールドとする活躍は顕著で、動物学の矢沢米三郎<sup>よねさぶろう</sup>、植物学の河野齡蔵<sup>こうの れいぞう</sup>、地質学の八木貞助<sup>ていすけ</sup>らの足跡には目をみはるものがあった。慎太郎は文章の中で「山を科学せる三星」と称して仰ぎつつ親しく交わった。

また、大正2年（1913）北安曇教育会発行の小冊子『白馬獄』<sup>へんさん</sup>の編纂（相当部分を執筆とも）にもあたっている。

さらに、大正6年8月に日本で初めて創設され今も続く信濃木崎夏期大学の創設運動にも熱心だったという。初期講師陣などとの交流からも多くの刺激を得たことが、百瀬家に残る写真から伺える。

## ④對山館の食堂

昭和6年（1931）ころ、表通りに面したタタキの部分を洋風の食堂に改装した。これは当初、需要の高まりから営業を企図して計画されたのだが、当時は旅館と食堂の併業が認められず、いわばサロンとして開放されたモダンな空間となった。

「古い家をあんな風にしたら、安っぽくていけない」と古風を好む常連からはひんしゆくを買ったという。しかし戦時体制が強まる昭和13～14年までこの食堂には様々な人々が集まり、大町随一の文化サロン、情報発信地として機能していたようだ。

## 4. 對山館の舞台裏

大正から昭和初期にかけての最盛期には多くの人が對山館に働き、八日町界隈も活況を呈した。ここではその片鱗<sup>へんりん</sup>を紹介する。

### ①旅館のきりもり

慎太郎は對山館の「顔」として登山者には親切を尽くしたが、帳場の仕事には熱心ではなかった。旅館経営に苦勞していたのは金吾であり、金吾なきあとは義弟熊井文吾の夏場の応援をリレーして、もっぱら長女美江<sup>みえ</sup>だったという。妻みつるは台所を取り仕切り、衣食住の全般にわたって接客サービスに目をくばり對山館を常に下から支えた。

金吾が静かに帳場にたたずみ、そろばんをはじく姿は遠来の客には印象深かったようで、對山館のひとつの風景としてたびたび紀行文などに登場する。

## ②家人のはたらき

大正の終わりから昭和の初めの話として、對山館には料理人と使い走りの小僧さん、ねえやさん（女中）が6人ほど、ご飯炊き、布団の維持管理をする「お布団婆<sup>ふとんばあ</sup>」がいて、別にお子守のねえやさん（もうやと呼ぶ）が慎太郎の娘ごとについていた。そして夏場はさらに臨時の手伝いが加わった。大勢の客とあいまった当時の盛況が想像される。

## ③八日町界限のにぎわい

戦前の話として、對山館の周辺には味噌屋・荒物屋・下駄屋・菓子屋・肉屋・魚屋・八百屋・レコード店・食堂・茶屋・呉服屋など様々な業種の店が並んでいた。江戸時代同様に大町で一番にぎやかな一角だったのである。對山館前にはよく煮豆売りが来たりラーメンの屋台がとまり、流しの芸人もしばしば招き入れたという。

## 5. 山と慎太郎

慎太郎の文章を読むと、山に「威厳(父)を内包しつつ慈愛(母)に満ちた神的なもの」をみていたように思われる。

初登頂・初登攀<sup>とうはん</sup>、征服、開拓といった、いわゆる「先鋭登山家」に一般的にまつわる言葉は慎太郎には似つかわしくない。彼にとって山は対峙<sup>たいじ</sup>すべき「存在」ではなく、抱擁<sup>ほうよう</sup>されるべき「懐<sup>ふところ</sup>」だったとでも言えようか。

終戦後の晩年、「心の寄り所は山への思慕であり、山への憧憬を有つ人々への懐かしさである」とも、「山を想へば人恋し、人を想へば山恋し。童謡ならぬ老謡を口吟<sup>くちん</sup>みながら、我ながらいつまでも抜けきらない老センチメンタリストを自分に発見するのである」とも語っている。

## ①スキーのさきがけ

慎太郎は、大正3年（1914）前後に、ロシア人で山好きの商人アレキサンドル・グーセフからスキーを買い夜の田んぼで滑り始めた。弟の孝男も大正9年ごろ大町中学の物置にあった6台のスキーを見つけ、明治44年レルヒ少佐から直々に指導を受けた体育教師里見源次郎の助言を得て友人と校庭や田んぼで滑り始めた。

慎太郎も孝男もそれから熱中し仲間と東山の乗越<sup>のっこし</sup>（女犬原<sup>めいぬづら</sup>）や中山の裏山で滑った。

大正12年1月3日からは富士山スキー初登山者のひとり和田宗吉を頼んで松本の山岳写真家山口勝・伊藤孝一・赤沼千尋・与口文次郎らと一週間も乗越で特訓している。この講習会で伊藤・赤沼・百瀬の冬山登山の夢がふくらみ、直後の「雪の立山・針ノ木越え」へとつながっていく。

また慎太郎は「山岳写真家、手塚順一郎らと図り、第1回全日本選手権大会（大

正12年2月開催)に出場した飯山中学校・富井宣威選手(野沢温泉)を招いて乗越での講習会を開催した。将来へスキー普及を念願した画期的行事であった。」

(『シュプール』(1988)より)

さらに昭和2年ころには仲間や小学生たちと中山の表山に大町(中山)スキー場を開き、少しして鷹狩山の中腹にも東山スキー場を開いた。そして昭和4年12月、平林武夫・平林卓爾<sup>たくじ</sup>・片桐(清水)悟郎らと大町スキー倶楽部を結成、初代会長となった。

どうにもスキーはうまくならなかった慎太郎だったようだが、1週間の特訓を「たゞ子供の様に滑るのが嬉しいといった他愛もないものであった。でもそれがスキーの入門であって、兎に角一通りのスキー熱は与へられたのであった。此の企ては此の地方に今日のスキー隆昌<sup>りゅうしょう</sup>の緒を作ったといふ事は言へると思ふのである」と晩年に語っている。

## ②雪の立山・針ノ木越え

- ・ 大正12年(1923)1月12日から伊藤孝一らと大沢小屋まで偵察。
- ・ 同年2月20日、伊藤、百瀬、赤沼ら5名、大町の案内・荷担ぎ13名で「針ノ木越え・立山」を目指して出発。22日から27日まで猛吹雪のため大沢石室に5泊停滞の後断念して下山。このとき伊藤が黒部川の平に待機サポートを依頼しておいた佐伯喜佐右衛門<sup>さへきさごえもん</sup>ら越中衆8人が伊藤らの身を案じて悪天候について立山温泉から平に下り針ノ木峠を越えて大沢石室に合流している。伊藤も記すように、登山史に残すべき超人的な記録である。
- ・ 同年3月5日、富山側からの再起を期して伊藤、百瀬、赤沼ら5名、佐伯平蔵・佐伯福松ら越中の案内・荷担ぎ21名、総勢26名が芦峯寺を出発。7日立山温泉着。吹雪のため12日まで停滞。立山雄山登頂を果たし17日立山温泉出発、平小屋着。雨のため停滞を重ね21日発、針ノ木峠に立ち大沢石室着。22日大町對山館着。

この山行で慎太郎はスキーを試み、名古屋の資産家であった伊藤はその資金を提供するとともに、撮影技師を同行させて「まずは家族に見せるため」の映画を作っている。これは未知の世界の記録として世間でも評判となり、6月には天皇陛下にも献上された。

この年の1月、日本登山界のリーダー榎有恒<sup>かつのぶ</sup>・板倉勝宣<sup>かつのぶ</sup>・三田幸夫らが立山で猛吹雪にあい、松尾峠で板倉が遭難死している。そのため当時の登山界は百瀬らの壮挙を「金にあかした大名登山」として埒外<sup>らちがい</sup>に無視せざるをえなかったし、百瀬自身も盟友榎を気遣い後々までことさらに自慢しなかった。

もっとも慎太郎にせよ伊藤にせよ、赤沼にせよ、その動機の根本は「個人的な夢の実現」であって、「登山史に1ページを加える」ことではなかったのである。

### ③大沢小屋創設前後

大正6年（1917）夏、箆川谷大沢出合対岸に石積み置き屋根の「大沢石室」ができた。これは慎太郎の小学生時代の校長であり、植物学者にして登山の普及にも熱心だった河野齡蔵が設計し、慎太郎への河野の私信から推して、慎太郎が少なくとも場所の選定と経費見積りをして作られたものである。

大正14年（1925）、慎太郎は石室の登山道をへだてたすぐ隣に木造の大沢小屋を建て、昭和初期まで両者は並存する。

燕山荘を大正10年に建てた赤沼千尋は、「山を冒<sup>ぼう</sup>険<sup>けん</sup>するものだ」として暗に小屋を建てた自分を非難する親友の百瀬を再三誘惑してその気にさせた、と記している。事実、慎太郎は家族の反対を押し切って建てたのだが、なぜ石室と並存までして建てる決心をしたのか。

一説に、厳冬期の針ノ木越え立山登山の失敗（大正12年2月、猛吹雪で大沢石室に5泊停滞中にその寒さや焚火の煙の充満に苦しめられ下山）の要因として、今後さかんになるだろう冬山登山の避難小屋としての石室の失格を身をもって知ったからだ、といわれている。

### ④峠小屋顛末記

昭和3年（1928）5月、慎太郎は針ノ木峠の富山側に小屋を建てようと富山営林署を訪ねる。これは昨年末の箆川谷早大山岳部雪崩遭難への対処で大沢小屋が大いに役立ち、登山基地・避難場所としての山小屋の必要性を再認識したためだという。

富山営林署は「国有林はみだりに借地の許可をしないのが原則である」と取り付く島もなかった。慎太郎は「淋しい気持ちになると、俄かに人恋しさが強くなり」思いついてその足で滑川の水産学校に出向きホタルイカの研究をしていた石川欣一の父、石川千代松博士（東大）を訪ねる。博士は大阪毎日にいる欣一の大阪営林局への依頼を提案。欣一は営林局の知人吉江（日本画家吉江孤雁の弟）を頼んだらしい。（孤雁の妻は小谷の人だったので、慎太郎は孤雁に2度接見していた。）

昭和4年1月、借地願が認可され、9月に整地工事完了。

昭和5年（1930）7月、木造平屋建て間口3間奥行き4間の針ノ木小屋を竣工。

人のつながりの妙を示す峠小屋完成までの顛末である。

### ⑤黒部川 平の渡しの変遷と慎太郎

明治11年 針ノ木新道の開削にともない勿橋架設（13年まで）。

明治26年 ウェストン渡渉（と推定）。

明治39年 志村烏嶺、綱に籠<sup>かご</sup>のついた籠渡しを使用。

明治42年 安倍能成、鉄線にブランコ状の板を滑車で通した渡しを使用。烏嶺の後途絶していた施設を測量技師が再架設したという。

大正5年 この年「大町の対山館で造った籠の渡しができてみた」（板倉勝宣）。針金に滑車が通り3尺四方の板がついていたという。

大正7年 「黒部川の籠渡しに六月中に信野鉄道の後援で修理」(百瀬慎太郎)された。

同年 伊藤孝一、滑車に籠のついた渡しを撮影。

大正12年 3月、伊藤・百瀬・赤沼らブランコ状の渡しを利用、映像に収める。

大正15年 電源開発にともない日本電力が吊り橋を架設。何年か鉄線渡しも並存。

昭和36年 黒部ダム建設工事で吊り橋水没。

吊り橋ができるまで、平の渡河施設は厳しい気候条件の中で何度も架け替え・補修が行われた。大正5年に自らが作ったとは思えないが、慎太郎が針ノ木峠を越えて登山ルートの整備にもかかわっていた事実は興味深い。

## 6. もっと慎太郎

野遊びの昼の一場面。石川が持参した薄切りのベーコンが焼けども焼けども出てくる。これを見て慎太郎は「なるほどこれがベーコン不滅ですね」。

(石川欣一『可愛い山』より)

山への深い造詣とともに、芸術文化諸般の広範な教養を身につけていた。さらに当時の人には珍しく独特のユーモアのセンスを持ち合わせていた。親しかった小笠原勝は遺稿集『山を思へば』の中で慎太郎を「文化人というより趣味人とか通人といった方がふさわしい」と語っている。そこに多くの人を惹きつけた魅力の源があったと思われる。

ここでは、あまり知られていないそんな横顔のいくつかを紹介する。

### ①短歌と慎太郎

慎太郎は20歳前後に安曇野短歌会に入って盛んに歌を作った。仲間には大町中学同窓の小松宗邦、浅野賢三、腰原峯三らがいた。

明治44年、慎太郎は若山牧水門下となる。しかし、後年、池田町に疎開していたアララギ派の歌人、岡麓とも親交をもち、島木赤彦に誘われ「アララギ」にも会費を収めていた。また、古泉千櫨、長塚節の影響を受けていたともいわれる。慎太郎自身も「歌では生涯師をもたなかった」と述べていたといわれるように、流派を超えた自由な発想で、自然流露の歌境をしめし、晩年は古語を自由に駆使した格調の高い歌を残した。

大槍は穂先かくして明神の岳は棚雲の支柱の如し

高山の嶺よりなだり落つる水此の水を飲んで命永らふ

遠雲を眺めてあればま近くを影を落として走る雲あり

大き溪深き黒部の谷だにの水音集まりて聞こえるかな

いくそたび我がのぼりけむ山々の姿を見れば眺めあかぬかも

『昭和万葉集巻6』(講談社)掲載五首

## ②絵も描いた

百瀬家には慎太郎が描いたスケッチブックが何冊か残っている。内容は山、人、温泉風景、山と街のある風景などで、躍動感のある絵だ。人物を描いた作品には竹久夢二ばりの美人画もある。描き方は自己流だといわれている。その時々感動を、短歌と同様に描きとどめたものであろう。

## ③酒と慎太郎

「調理場の横の薄暗い茶の間の壁際にはいつもコモかぶりがデンとすわっていた。灘の酒、秋田の酒などで地酒は使われなかったようだ。コモかぶりに差し込んだのみ口の栓を抜いて片口に酒を移すゴボン、ゴボンという音は今思い出してもなつかしい。その音はいかにものどかで豊かな音であった」(小笠原勝)

四斗樽しとから片口かたくちに注がれるその音は、まさに「對山館たいざんくわんの音」だっただろう。

この酒は客用であるとともに自家用だった。酒と友を愛した慎太郎は、来訪を喜んで茶の間(慎太郎いわくこづかいべや小使部屋)に招き入れ、酒を酌くみ交わしつつ語り合っただといわれる。

## ④子どもと慎太郎

慎太郎は子ども好きだった。自分の子は娘ばかり4人だったので、男の子や元気な少年が大好きだったという。

近所やあずかった親友(石川や山田)の子どもたち、娘たちをよく引き連れては、ユニフォームたる着流し姿で農具川や東山中腹の越の湯や靈松寺、遠くは木崎湖へ出かけ、道々教えるともなく、かしこまることもなく、山々のことや諸般の教養を伝授したそうだ。

「俺は桃太郎になった気分だ」と語ったその光景が目浮かぶ。

## ⑤町と慎太郎

慎太郎は好き嫌いの激しい人、つまり客あしらいという点では旅館業に不向きな人だったとも語られているが、八日町の町内の人々とは普通の近所づきあいを保っていたようだ。酒の入る会合などでは独特のユーモアで場をなごませ、人気だったという。

對山館は旅館一般の消費のほかに、登山者や案内者、荷担ぎのかなりの山用物資を近所の店から調達していた。對山館の隆盛は町の繁盛にも少なからず結びついてはいたはずだ。

## ⑥分け隔てなきつきあい

慎太郎は高飛車に権威をふりかざす人を嫌った。その逆に社会的に弱い立場の人とは何の分け隔てもなくつきあい、家族が心配することもたびたびだった。

「よそのうちに行って、ひどくやぶれた寝巻ねまきを着ているのを見て「宮様のときのあまりがあるから出してくれ」と浴衣を持って行って上げたりした。(昭和12年

に) 針ノ木へ(久邇宮三殿下<sup>く にのみや</sup>を)お泊めしたときのあまりだ。母は「うちでは大事な浴衣だ」と言ったがきかなかった」(井垣美和氏談)といった逸話がたくさんある。

三姉妹は「慎太郎は無欲で、そうした行動は当たり前で、自然な振舞いだった」という共通の記憶をもっている。

登山者とのつきあいでも、これは同じだった。身分・地位・財産を超えて、「山」で結ばれることに最大の喜びを覚えていた慎太郎ゆえに、自然な人の垣根ができたのであろう。

## IV. 大町登山案内者組合

大正6年（1917）、慎太郎は独力でわが国初の登山案内者組合を結成し、對山館に事務所をおいた。これは時代の要請と、小島烏水<sup>うすい こうの れいぞう</sup>、河野齡蔵<sup>あきむね</sup>など山のブレーンの助言、地元山案内人の誇りと生活の安定などを勘案しての慎太郎の決断だった。この動きはやがて白馬<sup>ありあけ</sup>・有明<sup>からすがわ</sup>・烏川<sup>くわがわ</sup>など近隣の登山口へと波及する。

組合の取り組みは登山者に質の高いガイドサービスを提供し、大町山案内人の名を高らしめた。

慎太郎は登山者と地元山案内人との間でいっそう心を砕かねばならない立場に自らの身をおいたといえる。

### 1. 大正・昭和初期の登山事情

明治時代にはじまりを見せた国内の近代登山は、大正時代に入ると、さらにその裾野を広げる。明治40年（1907）、白馬岳頂上の石室に山小屋が併設されてから、大正初期までに北アルプスでは次々と山小屋が開設された。また、大正2年（1913）には陸地測量部によって、北アルプス部分の5万分の1地形図が発行される。

大正初めには、北アルプスの各方面への登山口を持つ大町にも、東京などから登山者の来訪が増加し、当時、大町周辺の各登山口から1,000名を越える登山者が入山したという。

当時、東京方面から大町への交通手段は、列車を乗り継いで松本か篠ノ井線明科<sup>あかしな</sup>駅まで来て、明科からなら大町までおよそ20kmの道程は、ガタ馬車とか円太郎馬車と呼ばれた乗合馬車によるものであった。しかし、大正5年（1916）に松本・大町間の軽便鉄道（信濃鉄道）が開通したほか、自動車の普及により、乗合馬車は昭和初めに明科・大町間から姿を消すこととなる。

### 2. 山案内人と登山案内者組合

山案内人とは、登山者が望む登山を安全かつ確実に先導して収入を得る者で、登山案内者ともいう。初期の山案内人は登山者の荷物を一部背負う歩荷<sup>ほっか</sup>も兼ねた。その信州側でののはじまりは明治中期のことで、登山者に請われ、山の地理などに詳しい地元の獵師<sup>やまうど</sup>など山人が副業として山案内をしたことにある。一方、富士山や立山などでの信仰登山においては古くから参拝のために登る者を先導する者がおり、登拝者の荷物を運び上げる強力や歩荷などと呼ばれる人夫たちが同行した。彼らも近代登山の隆盛とともに山案内人へと姿を変えていった。

大正時代に入り、登山道・山小屋・地図など登山環境も急速に整備されてきたが、まだまだ危険をともしなう野営が主だったので、実際の登山には案内人の存在が不可欠であった。北アルプス各方面へ登山口を持つ大町では、当時、夏期中心に案内人の需要が鉄道の開通などによる登山者の増加で急テンポに高まり、質の高い山案内人の安定した供給が求められた。こうした要請を敏感にとらえた百瀬慎太郎は、大正6年（1917）に大町登山案内者組合を結成し、山案内人の資質向上などを目指した。結成時の組合員は22名であった。

### 3. 山案内人の仕事

山案内人の一番の仕事は、登山者の希望にそった山行を安全・確実に先導することにある。また、初期の山案内人は客の荷物を一部背負い、歩荷も兼ねた。そして山行中の一切の露営や食事の世話もし、登山者はテント泊で山案内人は油紙で仮小屋を作るか岩陰に宿をとることが一般的であった。そのため、料理上手はもちろん、焚き火や囲炉裏を囲んだ夜の話が得意なことも重要な要素であったという。

次にあげたのは、明治末の日本アルプス夏山登山での装備・食糧などの荷物や現地調達品の一覧である。これらから当時の山での生活が想像できる。

- 「衣」 ルックザック・肩掛け靴・草鞋（1日1足）・雨具として着莫産（越前莫産）と油紙・脚半・カナカンジキ（雪溪下降時使用）・メリヤスのシャツ・メリヤスのズボン下・夏用洋服・和服・鳥打帽・股引・手拭
- 「食」 米・味噌（なるべく辛いもの）・醤油エキス・鱈節・梅干・干瓢・椎茸・白子干・桜蝦・葱・馬鈴薯・味付海苔・ワカメ・パン・焼麩・砂糖・スターチ・ビスケット・果物缶詰・甘酒やお多福豆の缶詰・ウィスキー小瓶・ナイフ・フォーク・匙・缶切り・飯盒・小鍋・燃料は生のハイマツ・イワナ・筍・アザミ類・シダ類の若菜・イワブスマ（地衣の一種）の澄まし汁・ウドの味噌汁・岳蕨の味噌汁・アザミの味噌汁
- 「住」 テント（片桐特注の2～3人用）・テント代用の油紙（四畳半・仙花紙を蕨糊でつぎ、亜麻仁のボイル油を塗ったもの）・毛布・提灯（蠟燭）・西洋蠟燭・アセチレン灯・火縄・マッチ・小刀・針金・糸・紙・鉛筆・万年筆・小楊枝・歯磨・石鹼・薬品数種・捕虫網

以上の品物など登山客の荷物が約4貫（約15kg）

※ 上記は田部重治著『わが山旅五十年』（桃源社、1964）より、田部が行なった明治38年（1905）日本アルプス夏山縦走と明治43年白馬岳登山の記述から拾ったものである。

### 4. 山案内人プロフィール

#### ①結成当時の主な山案内人たち ※

- 伊藤 菊十 大町山案内人の元祖。獵夫育ちで数十年山に経験あり。
- 大西 又吉 大町山案内人の元祖。経験豊富で山の勘のよいこと一番。体格は村相撲の元大関で、大砲（明治後期の横綱）似の顔つき。
- 勝野 玉作 大町山案内人の元祖。精悍。強情で進んで帰ることを知らぬ勇者。
- 伝刀 林蔵 大町山案内人の元祖。沈着。思慮深く落着きあり。
- 黒岩 直吉 大町一流の山案内人。勇氣。
- 佐藤 静馬 大町一流の山案内人。徹頭徹尾、忠実にして剛力。
- 松沢 由蔵 大町準一流の山案内人。その無邪気と元気は客に快感を与えること請け合い。

## ②戦後活躍した主な山案内人たち※

大和 由松<sup>おおわ よしまつ</sup> 17才頃から山案内をはじめ、後に有明案内人組合結成を指導。当時めずらしい「スキーのできる山案内人」。昭和2年（1927）夏、秩父宮殿下の槍～双六・笠縦走を案内。同年12月の箆川谷での早大遭難時に案内、以後「動かずの由松」と言われる頑固な性格を發揮。昭和10年、京大白頭山遠征参加。山案内人から近代的ガイドへの過渡期に生きたひとり。

桜井 一雄<sup>かづ お</sup> 大正7年（1918）ころ組合へ参加。当時最も短期間で案内人になったひとり。祖父の伴五郎<sup>はん ごろう</sup>が大町有数のカモシカ撃ちであったため山に通じ、大西又吉を山案内の師匠とする。脚が達者で力持ちだが、動物好きの一面も。山も詳しくスキー登山もできる名案内人で、石川欣一や冠松次郎や立教大山岳部らを案内したほか、多くの客から指名を受ける。加藤文太郎や早大遭難救助にも立ち会う。次のようなユニークなあだ名がその人柄や人物像をうかがわせる。「石橋」…当時近所では珍しかった石製の渡し橋が自宅前の水路に架かっていたことから「石橋」という屋号が付けられ、それがあだ名となる。「洋行帰り」…懇意にしていた石川欣一からもらったピッケル、ザック、登山靴を身に付けた姿は当時の山案内人たちからすると異様に映り「洋行帰り」とあだ名される。「肺バカ」…マラソンは決して負けたことがなかったことから「肺バカ」とあだ名された。

平林 高吉<sup>たかきち</sup> 桜井一雄にさそわれて昭和初期に参加。石川欣一を針ノ木峠へ案内。

勝山佐久衛<sup>さく えい</sup> 昭和初期に参加。平鹿島<sup>たいらかしま</sup>生まれで、山を自分の庭とする。冠松次郎、田部重治、石川欣一、大島亮吉、久邇宮妃殿下、大佛次郎<sup>おほらぎじろう</sup>らを案内。加藤文太郎遭難救助にも立ち会う。

桜井 親次<sup>ちかじ</sup> 桜井一雄の弟。イワナ釣りの名人でもある。

※ ①・②の内容は『山を想へば』（百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962）、瓜生卓造著『おおまち物語』（山と溪谷社、1976）、平林武夫先生遺稿集刊行会編『残雪』（信濃教育会出版部、1979）にある記述を抜粋・参考したほか、黒岩志げ子氏・俊夫氏および櫻井幸雄氏・松子氏からの聞き取りによる。

## 5. 武勇伝・珍談・奇談… エピソードにさぐる

### ①「口でザイルをくわえる」

昭和初めのころの話である。大阪のある女子学校で針ノ木・立山・剣への縦走を計画し、信州・越中両側から山案内人が選ばれたが、何かにつけて張り合う両衆であった。そんな中、針ノ木小屋に泊まった夜のことで、小屋宛に送ったもち米を信州側の山案内人が盗み食いしたという疑惑を越中側の山案内人からかけられた。しかし、盗み食いの事実ははっきりとしなく、一行にぎくしゃくした空気が漂う。

その翌日、長次郎の雪渓を渡っていたときのことで、どうしたはずみか前夜、疑惑をかけた越中の山案内人が確保していた3名の生徒がザイルもろとも転げ落ちてしまった。これを見ていた信州の山案内人のひとは、自分の確保していたザイルの一端を口にくわえ、落ちてくるパーティーのザイルへ飛びついて転落を止め、雪渓のど真ん中でふんばり事なきを得た。それがもち米泥棒の疑惑をかけられた者であった。その日、小屋に入ってからのこと、前夜に疑惑をかけられた信州の山案内人は「山案内人もあろうものが、女の子の2人や3人確保できなくてどうする。もち米の1俵や2俵はどうでもなるが、人の命というものはそこらの店にはめったやたらに売ってはいねえんだぞ！」とまくし立てた。もち米泥棒の言いがかりをつけたその案内人は、これにはただ平謝りするしかなかったのである。

※ この内容は平林武夫先生遺稿集刊行会編『残雪』（信濃教育会出版部、1979）に掲載の記述を要約したものである。

### ②「山案内人試験珍問答」

長野県では大正12年（1923）に「案内人取締規則」が号令として出された。その当時は山案内人の免許を得るため、山のことを全く知らない巡査部長の試験を受けなければならないこともあった。その口頭試問の様子はおよそ次のような様子であった。

試験官「世界で一番高い山はどこだね？」

山案内人「エベレストです。」

試験官「バカこけ、ヒマラヤだ。よく覚えとけ！」

そのほか高山植物の名を30種類あげろ、などといった問題も出た。山案内人たちは尻取り形式で覚えこむ。チングルマ、マイヅルソウ、ウルップソウ…。30にならないときは、「ミヤマ」と「タカネ」をくっつけて適当なことをいう。試験官にとがめられれば、どこどこの何々沢には確かにきれいな花をつけて咲いているなどと、なるべく人の行かない場所をあげてあたかも実在するかのような説明を付け加えれば「よし」で通ったという。

※ この内容は『山を想へば』（百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962）に掲載の記述を要約したものである。

### ③「ピッケルでカモシカを狩る」

昭和はじめのころの話である。3月、ある山案内人が地元中学の教師を案内して黒部へ入った。途中、ふたりは新雪が一尺ばかり積もった樹林帯で丸々と太ったカモシカと出くわす。山案内人は居ても立ってもいられず、客の教師をその場に待たせてカモシカを夢中で追った。カモシカは雪の中では脚が埋まってしまいヨタヨタ歩きになる。追いついた山案内人は、カモシカがこちらに顔を向けた瞬間、「ここだ！」とばかりに手に持ったピッケルでカモシカの額に力任せの一撃を加えた。まんまとカモシカ一頭を狩ったわけだが、猟の支度をしていなかったために泣く泣く肉は捨て、角と毛皮だけを持って帰った。その日、平の小屋につくと小屋番が「おい、食うものがなくて困ってる」という。今しがた捨ててきたカモシカの肉のことを話すと、小屋番の目の色が変わった。それから2人は3時間かけて肉を取りに行ったのは言うまでもない。

※ この内容は瓜生卓造著『おおまち物語』（山と溪谷社、1976）に掲載の記述を要約したものである。

### ④「"バック"で通す」

山案内人は外国人登山客を案内することもあった。昭和のはじめ、山登りをするためにひとりのドイツ人が大町へ知人をたよってやってきた。しかし、その知人は都合が合わず、自分の代わりに山を案内してくれる、英語ができる山案内人を探すことにした。適任者探しに苦労していると、ある山案内人が「私は自動車の助手をしていたので、ひとつだけ"バック"という英語は知ってるから何とかできるでしょう」と言い、ようやく引き受けた。白馬、立山、槍、穂高への2週間にわたる縦走で、大町で待つ知人は言葉の通じない2人の不便を心配していた。

元気に帰った山案内人に「英語はどうした？」と聞くと、「いやそれがせ、英語というのは有り難てえもんで、小屋へ入るときには"小屋へバック"、頂上へ登るときは"頂上へバック"、下るときは"下へバック"、荷物を背負うときには"あなたの荷物をこちらへバック"という具合で、お客さんもほかのことは分からねえが、終わりの"バック"だけはよく分かるんで、実に面白い山歩きができたわね」とのこと。「客人は喜んだかね？」と聞くと、「いやはや喜びましたよ。松本駅で別れるときには向こうが"バック"をやりましたよ。"アナタ大町へバック、ワタシハドイツへバック"。」

※ この内容は平林武夫先生遺稿集刊行会編『残雪』（信濃教育会出版部、1979）に掲載の記述を要約したものである。

## V. 對山館その後

昭和18年（1943）6月、對山館はおよそ50年の幕を閉じ、戦時体制の強化の中で軍需工場とされた昭和電工の寮となり、戦後は個人の医院となった。

昭和24年3月5日、慎太郎は56歳3ヶ月の生涯を閉じる。

大沢小屋と針ノ木小屋は長女美江へ、現在は孫の堯たかしに継がれ守られている。

大町山岳会は昭和32年（1957）、大沢小屋前で慎太郎を偲ぶ祭りを挙げる。翌年からは「慎太郎祭さい」として毎年開催されるようになった。

### 1. 戦争と對山館

昭和18年（1943）6月、對山館は50年あまりの歴史を閉じる。建物は軍需工場となった昭和電工の寮として売却され、百瀬家は近所の借家に移り住んだ。

昭和21年7月、大町観光協会設立にともない専従、22年、日本山岳会信濃支部設立に尽力、23年、日本アルプス山小屋組合の副会長に就任と、戦争の様々な痛手の中で社会的な働きをするとともに、「山岳夜話」などの随想を書き始める。

昭和22年、長く放置された針ノ木小屋補修、23年大沢小屋再開。

新しい時代を迎え、さらなる活躍が期待されたが昭和24年（1949）3月5日、百瀬慎太郎は食道癌のために逝去した。享年56歳3ヶ月であった。

### 2. 山小屋のともしび

慎太郎亡き後、針ノ木・大沢両小屋の経営は長女美江が引き継いだ。慎太郎を慕う人々、針ノ木を愛する人々の支えで昭和31、39年と二度針ノ木小屋の大改修増築工事を手がけ、大沢小屋も昭和44年に前面改築した。

現在は内孫の堯が三代目として山小屋の灯をともし続けている。

### 3. 大町山岳会のあゆみ

#### ①戦前の活動

大町山岳会の発足年についてははっきりした記録はないが、昭和初めころともいわれ、戦前にはすでに百瀬慎太郎を中心とした会が存在したという。昭和22年（1947）6月、慎太郎は日本山岳会信濃支部創設のために榎有恒と松本へ行っている。このとき、大町周辺から同行した賛同者のなかに平林武夫ら大町山岳会の会員が名を連ねていたという。当時この一団に正式な名称があったかどうかは定かではないが、彼らが大町山岳会を形成していたという推測もできる。

#### ②戦後、平林武夫の中興

昭和25年（1950）、松川村出身で百瀬慎太郎と親交のあった平林武夫は、大町山岳会を再建する。そのころから平林は慎太郎のレリーフ建立に尽力し、昭和28年8月、同会により大沢小屋前に銅製レリーフが建設された。

昭和32年、平林が会長となっていた大町山岳会では、親族と関係者を招き慎太郎を偲ぶささやかな催しを大沢小屋前で行う。翌年からは「慎太郎祭」として恒例行事となり、現在も実行委員会により毎年6月に開催している。

### ③ 慎太郎祭秘話

針ノ木岳慎太郎祭では一斗樽が夏山安全祈願の祭場である針ノ木雪溪上へ運ばれ、祭壇の中央にすえられる。これを担ぎ上げるのが大町山岳会の新入会員に課せられた役目である。そして祭壇には「平武漬<sup>ひらたけづ</sup>け」「山姥<sup>やまんば</sup>揚げ」という一風変わった供物が奉げられる。前者は平林武夫考案にちなむ塩らっきょうの浅漬け、後者はライチヨウに思いをはせた鶏の唐揚げである。さらに参加者の喉を潤すのが登山道わきの湧水「針ノ木正宗」(平林命名)。かつてはこの水で「流しソーメン」も行なわれており、今もその再開を願う声が多々聞かれる。下山後は「おしるこ」のサービスが待っている。

### ④ 法被由来

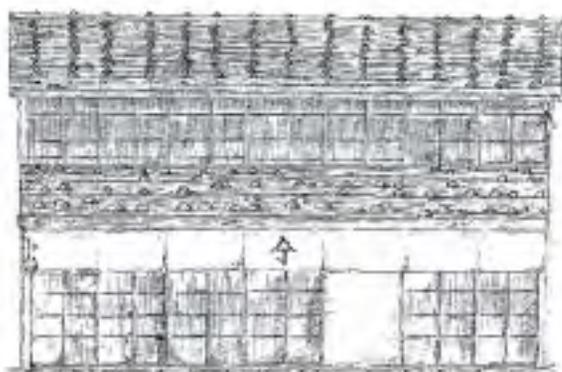
大町山岳会には独自の意匠で染め抜かれた法被<sup>はっぴ</sup>がある。現在でも総会や慎太郎祭などで会員の証<sup>あか</sup>しとしてまとう印半纏<sup>しるしばんこん</sup>であり、木綿製で藍色の法被は、その色落ち具合で古参か新参会員なのか見分けることができる。

法被が作られたのは昭和31年(1956)ころといい、法被の背にある「」の意匠は山本携挙現会長が当時考案し、襟の「大町登山口」「大町山岳会」という文字は、大町登山案内者組合の法被の字体を同氏が模したものである。

# 展示図版説明



1-1 登山者を送り出す百瀬慎太郎



1-2 對山館以前の百瀬家のイメージ



2-1 南画家長井雲坪の真筆扁額（当館 蔵）



3-1 昭和16年7月15日の對山館



3-2 慎太郎



3-3 若き歌人たち（明治45年ころ）



3-4 食堂風景



3-5 雪の針ノ木峠に立つ（大正12年3月）



3-6 印章（信濃大町・百瀬慎太郎）



3-7 燕岳にて



3-8 「王子神社の裏道」 (昭和12年ころ)

## VII. 展示資料目録・資料解説

※ ここに挙げた資料は主な展示資料である

### I. 對山館誕生前史

1-1 登山者を送り出し百瀬慎太郎 百瀬 堯 蔵  
昭和初期。

1-2 對山館以前の百瀬家のイメージ

### II. 對山館の誕生

2-1 南画家長井雲坪の真筆扁額 百瀬 堯・遠藤三春(保管)  
明治29年(1896)1月から3月までの對山館滞在中に書かれたと推定される「對山館」の扁額。このとき雲坪は「北安文雅会」を主催し、金吾は事務局をつとめている。「金吾はその字を見て稚拙と感じ、納戸にしまいこんでしまった。あるとき書壇の第一人者、日下部鳴鶴が訪れたので扁額の揮毫を頼んだ。鳴鶴はそのとき雲坪の字を見て驚愕し、この額こそ「外額」として飾るように勧めた。」との逸話が残る。

### III. 對山館と慎太郎

3-1 (写真) 昭和16年7月15日の對山館 百瀬 堯 蔵  
この年の12月に日本軍はハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争が始まる。平穩そうに見える對山館も、この頃から「春なき冬」へ向かっていく。最左の建物は八十二銀行。

3-2 (写真) 慎太郎  
7歳くらい。

3-3 (写真) 若き歌人たち(明治45年ころ) 百瀬 堯 蔵  
短歌を同好する大町中学時代の同級生たち。左より慎太郎、小松宗邦、腰原峯三。下、浅野賢三。

3-4 (写真) 食堂風景 百瀬 堯 蔵  
右から石川欣一、平林卓爾、慎太郎、一人おいて小笠原勝、桔梗英二、弟孝男。「對山館にはネタがある」と、新聞記者もたえず訪れたという情報発信の場でもあった。

3-5 (写真) 雪の針ノ木峠に立つ(大正12年3月) 百瀬 堯 蔵  
大正12年3月21日。

3-6 印章(信濃大町・百瀬慎太郎)  
慎太郎らしいユーモアのある手作りと思われる印章がこのほかにもある。

3-7 燕岳にて 百瀬 堯 蔵  
左が慎太郎。右は御茶ノ水女子大の岡田先生。

3-8 「王子神社の裏道」(昭和12年ころ) 百瀬 堯  
娘たちや熊井文吾、山田珠樹の子息など子供や青年を引き連れて木崎湖へ昼を食べに行く途中。慎太郎は山田や石川などの子を夏期休暇中長くあずかった。逆に娘たちを女学校を出たあとなどに長くあずけたこともあった。

# 百瀬慎太郎 執筆・編集歴

題 名	執筆・編集年月	備 考
「後立山連峰逆走記」 (未完)	大正2年8月末	
「烏帽子より槍ヶ岳への縦走」 (未完) 付「黒岳山塊・焼岳」	大正2年8月	
「日本北アルプス山岳」	大正2年8月	『信濃毎日新聞』連載8回
『白馬嶽』編集	大正2年9月	北安曇教育会発行
「高瀬の鉄砲流し」	大正3年10月	『山岳』第9年第3号
「立山から剣へ」	大正3年	
『山を思ふ』第一輯 (編集者・印刷者として)	大正4年8月	山を思ふ会発行
「ガイドのことども」	大正4年	『山岳』第10年第2号
「大町口登山案内」 (リーフレット)	大正4年ころ	對山館発行
「立山から剣へ」	大正7年8月	『新家庭』(雑誌)増刊号
「大町登山案内者組合」	大正7年12月	『山岳』第13年第1号
「大町登山案内者組合」(続)	大正8年4月	『山岳』第13年第2号
「雪の立山を越えて」	大正12年	『新家庭』(雑誌)増刊号
『大町案内』編集に協力 (「大町口登山案内」掲載)	昭和2年9月	アルプス郷土社発行
「酔へるアルピニスト」	昭和3年	『郊外』4月号
「脛衣の香」	昭和3年	『郊外』4月号
「山案内者風景」	昭和6年6月	『文芸春秋』(変名にて)
「思ひ出断片」	昭和12年4月	『安曇春秋』(新聞)
「山岳夜話」	昭和22年2月より	『信陽新聞』連載21編
「山を眺める」	昭和23年4月	『読売新聞』
「針ノ木峠雑談」	昭和23年6月	『山々谷々』
「山の名前」	昭和23年6月	
「細心に大胆に」	昭和23年6月	『大町高校新聞』
「五拾銭登山」	不 明	
「品右衛門のことども」	不 明	

※ 上記以外にも新聞掲載記事など、相当の執筆・編集歴があると思われる。

# 對山館と百瀬慎太郎 主要年表

年	出来事
文化12 (1815) 2月	大町中町にいた百瀬家の祖先、新右衛門が八日町の家屋敷を50両で買い取り、移転。
明治22 (1889) 11月	八日町の大火により百瀬家の屋敷も消失。
23 (1890)	春、先代百瀬新栄と金吾、旅館新築に着手。(推定)
25 (1892) 12月10日	父金吾・母万世 <sup>かずよ</sup> の長男として百瀬慎太郎が大町八日町の旅館、對山館に生まれる。
27 (1894) 12月	囲炉裏の熱湯をかぶり全身やけどを負う。右目失明。(2歳)
32 (1899)	大町尋常小学校入学。
36 (1903)	大町小学校高等科入学。
38 (1905)	県立大町中学校入学。(13歳)
10月	日本山岳会発足。
39 (1906)	初の北アルプス登山。白馬岳に登る。このとき初めて日本山岳会機関誌『山岳』を手にする。以降山に傾倒、毎年白馬に登るようになる。(14歳)
42 (1909) 7月	辻村伊助と会う。以来親交を結ぶ。
8月	日本山岳会入会。会員番号215番。(17歳)
43 (1910)	二高(後の東北大学)受験のため仙台に赴くが、連れ戻される。大町中学校卒業。
10月	黒部の主こと遠山品右衛門 <sup>しなえもん</sup> の案内で針ノ木峠を越え黒部の谷に入る。(18歳) ※ これは44年の可能性もある。
44 (1911)	若山牧水門下となる。(19歳)
大正2 (1913) 7月	針ノ木より大黒岳まで縦走。
8月	烏帽子(途中水晶・赤牛往復)槍ヶ岳縦走。(21歳)
3 (1914) 7月	葛温泉より東沢乗越を経て中房温泉へ降りる。
7月末	立山・剣。 登山概念図を独自に作成。 夏、石川欣一に会う。
12月	熊井みつると結婚。(22歳)
大正5 (1916) 7月	信濃鉄道、松本～大町間全通、大町駅できる。登山者急増。
6 (1917)	長女美江 <sup>みえ</sup> 生まれる。 独力で大町登山案内者組合結成(日本初のガイド組合)。(25歳) 大沢石室できる。
8 (1919)	信濃山岳会発足、幹事となる。
9 (1920)	次女美和生まれる。
11 (1922) 5月	残雪の立山より針ノ木越え。(30歳)
12 (1923) 1月	東山の乗越スキー場にて講習会を開く。
2月	針ノ木越え・立山登山を計画。吹雪が続き大沢石室で断念。
3月	立山を越え、針ノ木峠下降。同行、伊藤孝一・赤沼千尋ら。(31歳)

年	出来事
13 (1924)	槍ヶ岳から黒部五郎岳へ。
14 (1925)	大沢小屋創設。(33歳)
15 (1926)	三女三春生まれる。
6月	石川欣一と五色・立山行。 このころより石川欣一の紹介で岡野馨・山田珠樹を知り以来親交を結ぶ。
昭和2 (1927) 4月	西鎌尾根行。 四女美稔生まれる。
12月 暮れ	早稲田大学山岳部、箆川谷で11名全員が雪崩に巻き込まれ4名が行方不明となる。對山館を搜索本部とし、弟孝男が山案内人らによる搜索の指揮をとる。(35歳)
3 (1928) 6月	早大生4名の搜索に尽力。全員の遺体を収容する。
11月	このころより中心となって中山(大町)スキー場を開く。
4 (1929) 12月	大町スキー倶楽部が創設され、初代会長となる。
5 (1930) 7月	針ノ木小屋竣工。 大町の東山スキー場開拓。(38歳)
10 (1935) 6月	大町観光協会が設立され、平林武夫らとともに幹事となる。(43歳)
12 (1937) 8月	久邇宮三殿下を針ノ木小屋に迎える。(45歳)
16 (1941) 12月	日本軍真珠湾攻撃。太平洋戦争始まる。
17 (1942) 6月	對山館を廃業する決心をする。
18 (1943) 6月	對山館廃業。軍需工場(昭和電工)の寮となる。一家は近くの借家に転居。(51歳)
21 (1946) 7月	新たに大町観光協会ができ、専従する。(54歳)
22 (1947)	大町に疎開中の榎有恒と日本山岳会信濃支部設立に尽力。(55歳) 美江長男、堯 <small>たかし</small> 生まれる。
23 (1948)	日本アルプス山小屋組合の副会長となる。
7月	戦後初めて大沢小屋を開く。
8月	戦争中に大破した針ノ木小屋を解体、修理。このころより食物を飲み込むときに障害が出始める。
24 (1949) 3月5日	食道癌にて逝去。享年56歳3ヶ月。
28 (1953) 8月	大町山岳会、石川欣一、榎有恒らにより大沢小屋前の岩に記念レリーフが埋められる。
32 (1957)	大町山岳会、慎太郎を偲ぶ会を大沢小屋で挙行。翌年より今日まで夏山開きの祭典「慎太郎 <small>さい</small> 祭」として継続。
37 (1962) 8月	百瀬慎太郎遺稿集刊行会により『山を想へば』発行。

※ ( )内の慎太郎の齡はその年の誕生日をもつての満年齢を示した。

## 参考文献

- 赤沼 千尋  
赤沼 千尋  
秋山高志ほか編  
アルプス郷土社  
飯島 善士氏蔵  
石川 欣一  
石原 きくよ  
伊藤延男編・文化庁監修  
茨木 猪之吉  
上田正昭ほか監修  
ウォルター・ウェストン  
瓜生 卓造  
瓜生 卓造  
大塚民俗学会編  
大町山岳博物館編  
大町市・大町山岳会編  
大町山岳会編  
大町市史編纂委員会編  
大町市史編纂委員会編  
大町市史編纂委員会編  
奥田 淳爾  
  
北安曇誌編纂委員会編  
北沢 勝二  
  
栗林士郎氏蔵  
信濃毎日新聞社編集局  
清水 博  
菅江 真澄  
田部 重治  
富山県立図書館蔵  
中村 周一郎  
長野県立歴史館蔵  
はま みつを  
平林武夫先生遺稿集刊行会編  
廣瀬 誠  
藤澤 誠  
  
楨 有恒
- 「慎さん 北ア黎明期の人々(三)」。(『月刊新信州』). 1972  
『山の天辺』. 東峰書房. 1975  
『図録・山漁村生活史事典』. 柏書房. 1991  
『大町案内』. 1972  
「飯嶋家文書」. 大町市文化財センター寄託  
『可愛い山』. 白水社. 1987  
『山を想えば人恋し』. 郷土出版社. 1993  
『文化財講座 日本の建築 5 近世Ⅱ・近代』. 第一法規. 1976  
『山の画帳』. 朋文堂. 1959  
『講談社日本人名大辞典』. 講談社. 2001  
『日本アルプス 登山と探検』. 平凡社版. 1995  
『おおまち物語』. 山と溪谷社. 1976  
『雪嶺秘話 伊藤孝一の生涯』. 東京新聞出版局. 1982  
『日本民俗事典』. 弘文堂. 1994  
『ブルーガイド旅読本 上高地安曇野』. 実業之日本社. 2002  
『山の祝い』<sup>ほが</sup>. 第15回針ノ木岳慎太郎祭実行委員会. 1972  
『山の祝いⅡ』. 大町山岳会. 1998  
『大町市史 第3巻 近世』. 大町市. 1986  
『大町市史 第4巻 近代・現代』. 大町市. 1985  
『大町市史 第5巻 民俗・観光』. 大町市. 1984  
「信濃までの山越えのみち」。(『魚図シンポジウム第10号』). 1995  
『北安曇誌 第5巻 近・現代下』. 北安曇誌編纂委員会. 1984  
「文学のなかの大町 対山館をめぐって その1」。(『仁科路市史 編纂だより第32号』) 大町市教育委員会 1982  
「栗林家文書」. 大町市文化財センター寄託  
『近代短歌のふるさと』. 信濃毎日新聞社. 1965  
『画人長井雲坪』. 信濃教育会出版部. 1981  
『菅江真澄遊覧記 巻1 くめじの橋』. 平凡社. 1965  
『わが山旅五十年』. 桃源社. 1964  
「中島文庫」のうち「N15 信越新道等」.  
『北アルプス開発誌』. 郷土出版社. 1981  
行政文書『信越連帯新道起功之部』.  
『黎明の北アルプス』. 郷土出版社. 1994  
『残雪』. 信濃教育会出版部. 1979  
『立山黒部奥山の歴史と伝承』. 桂書房. 1984  
「画人雲坪と仁科の里」(『松本と安曇の話』). 安筑郷土誌料刊行会. 1967  
『わたしの山旅』. 岩波書店. 1968

- 
- 榎 有恒 『榎有恒全集Ⅱ』. 五月書房. 1991
- 宮坂 勝彦編 『銀河グラフィティ14 百瀬慎太郎』. 銀河書房. 1989
- 百瀬慎太郎遺稿集刊行会 『山を想へば』. 百瀬美江. 1962
- 百瀬 堯氏蔵 「百瀬家文書」.
- 柳原 修一 『北アルプス山小屋物語』. 東京新聞出版局. 1990
- 山口 高治郎 「長井雲坪」 (『長野県美術全集2 近代を拓いた先駆者たち』). 郷土出版社. 1992
- 吉田 絃二郎 『静夜曲』. 新潮社. 1934
- 若山 牧水 『静かなる旅をゆきつつ』. アルス. 1921
- 若山 牧水 『日本現代文学全集37』. 講談社. 1964

## 謝 辞

企画展開催にあたり下記の個人・団体の皆様ならびに関係機関から、貴重な資料の提供や調査などに対して、多大なご協力・ご後援を賜りました。ここにご芳名を記して心より深く感謝の意を表すとともに厚くお礼申しあげます。

### (個人)

百瀬 堯(慎太郎内孫) 井垣 美和(慎太郎次女) 遠藤 三春(慎太郎三女)  
寺田 美稔(慎太郎四女) 百瀬 千恵子 井垣 真理 遠藤 優子 寺田 春水  
飯島 善士 池田 清隆 石曾根 佐和江 扇田 孝之 金子 晴雄  
北沢 勝二 北澤 繁美 倉科 和夫 栗林 士郎 黒岩 俊夫 黒岩 志げ子  
小林 茂喜 櫻井 幸雄 櫻井 松子 篠崎 房子 田中 徳夫 原 大三  
平林 久人 山本 携挙 横川 仁 渡辺 英夫 飯島 喜久代 相澤 亮平  
清水 隆寿

(敬称略)

### (団体)

大町警察署 大町青年会議所 大町山岳会 長野県立歴史館

(敬称略)

## 對山館と百瀬慎太郎

岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る

執 筆 岑村 隆 / みねむら・たかし  
発 行 日 2002年10月5日 発行  
発行・編集 市立大町山岳博物館  
〒398-0002 長野県大町市大町8056-1  
TEL/0261-22-0211 FAX/0261-21-2133  
E-mail : sanpaku@city.omachi.nagano.jp  
URL : <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/>

